

●前回までの講義をふりかえって

【1】西洋経済史学の課題と対象

第1講 (1) はじめに 講義の概要と進め方

第2講 (2) 農業革命

第3講 (3) 産業革命

【2】イギリス産業資本主義確立過程

第4講 (1) 毛織物工業とマニュファクチュア

第5講 (2) ジェントルマン資本主義論

第6講 (3) 綿工業と機械制大工業

● 本日のテーマ

1 イギリス産業はなぜ衰退したか？

2 イギリス製鉄業の成立過程

3 製鉄業における産業革命

堀江英一『経済史入門』7章1CD 9章4A 10章1C

大塚久雄『欧州経済史』2章3

演習問題「19世紀末からのイギリス産業衰退の原因を論ぜよ」

【1】イギリス産業はなぜ衰退したか？

1 イギリス綿工業の衰退要因

前回：ミュール紡績機械を基礎としたイギリス綿業の発展

1831年 リング紡績機発明(アメリカ)→1870年代初頭に重要な改良が相次ぎ紡錘の自動化・軽量化、回転速度の向上。(ミュールでは断続的にしか行われぬ糸の引き伸ばし・撈りかけ・巻き取りが連続的に行われる→紡錘当たり生産量はミュールを30%上回る。自動化により不熟練労働力の使用が可能に)

19世紀末から20世紀初頭にかけてアメリカなど主要綿業国がミュール体制からリング体制へ転換

表) ミュールおよびリングの設置状況

イギリスのみがリング導入遅れる。：新技術採用の遅れ→なぜか？

2 イギリス「産業衰退(industrial decline)」論

ハリソン(1992):「最初の工業国家の不利益」

「わたしがいまもっている工場設備と機械から利益を得ているときに、どうしてそれらを廃棄しなければならないのか」

【2】イギリス製鉄業の成立過程

大河内暁男『近代イギリス経済史研究』岩波書店、1963

製鉄業：鉄鉱石から銑鉄を抽出し、さらに鍛造圧延する工程を含めた鉄の精錬業（製品は棒鉄とよばれる鍛鉄）

1 分析視角：産業立地と市場関係

東南部→農業の発展

北部（ヨークシャー西南部・ランカシャー東南部）→繊維工業

バーミンガムを中心とした西部ミッドランズ地方→金属工業

2 全国的鉄市場の形成過程

① 製鉄業の端緒

14世紀 ドイツのジーゲルランドで高炉（水車とファイゴの連結）開発

→15世紀 イングランドのサセックス県、セバーン河流域で製鉄マニュファクチュア成立
木炭高炉による銑鉄生産と木炭精錬による棒鉄生産の2工程に分化→森林破壊と棒鉄輸入

② 16世紀：バーミンガム局地的市場圏

バーミンガムの主産業：鞣皮業

繊維産業（毛織物）も存在するが衰退傾向

図) バーミンガム局地的市場圏

③ 17世紀前半：鉄製品および鉄販路の地域的規模への拡張

鉄鉱石・石炭の存在、豊富な水力→製鉄業・鉄工業の成長

局地的市場圏を超えて、周辺各地でおこなわれる週市・大市を介して遠方に販路拡大
南方・西方へ

ロンドンへ（流通独占を基盤とした鉄商人カムパニの抵抗）

バーミンガム・シェフィールド・ロンドンの三地域が金属工業中心地へ

【イギリス革命】

④ 18世紀前半：西部ミッドランドを中心とする全国市場の成立

3 18世紀前半の製鉄業の限界

マニュファクチュア段階の製鉄業：「燃料問題」と「動力問題」

- ・木炭を原料とする→木材（燃料）の枯渇→森林を追って奥地に分散
- ・水車利用→季節的不安定（夏季の水不足）

→パーミンガム・シェフィールドの金属加工業に必要な鉄を生産できず。

→燃料を石炭に転換する必要（×石炭が含む硫黄分が鉄をもろくする技術的困難）

【3】製鉄業における産業革命

需要 紡績機械 ジェニー紡績機（木製）から金属製へ
鉄道の発達

1 「ダービー帝国」の興隆

エイブラハム・ダービー(Abraham Darby)

1709年頃 シュロップシャーのブルックデール製鉄所で石炭をコークスにする方法を開発
→1735年頃には完成（コークス高炉）

1760年代 石炭による鉄生産がダービー家から一般に普及

- ・ 蒸気機関による送風→石炭消費の半減
- ・ 鉄生産は森林と水流から解放され石炭地域へ（木炭立地から石炭立地へ）：生産効率・生産高急増
- ・ 鉄は鋳物に使われ、鍛鉄は木炭による製法にとどまる。

2 ヘンリー・コートによる大量生産

1784年 ヘンリー・コート(Henry Cort)：パドル・圧延法開発（反射炉）

棒鉄生産：12時間1トン→12時間15トン

→機械・鉄道へ素材を提供

イギリス：棒鉄輸入国から輸出国へ

鍛鉄生産も南ウェールズ・スタッフォードシャーの石炭地域に集中

多数の小規模工場の競争

表) 製鉄業の構造『経済史入門』140-141頁

3 製鉄王クロウシェイの勃興と「衰退」

南ウェールズ（地域内に豊富な石炭・鉄鉱石）：19世紀中葉イギリス鉄生産の40%を占める。

クロウシェイ家

初代リチャード：18世紀中葉カーディフ（南ウェールズ）で製鉄所経営開始

19世紀初頭にはカヴァースヴァ製鉄所をイギリス最大の製鉄所に成長させる。

19世紀前半：製鉄業経営拡大

- 「製鋼革命」（製鉄業から鉄鋼業へ）：19世紀後半 ベッセマー法発明→鋼鉄生産

→巨大な新規設備投資の必要（旧来の生産方法のままでは収益悪化）

●クロウシェイの投資選択

・製鉄所近代化投資←証券資産保有（当時5%程度の安定的利益率）

・経営環境

①「製鋼革命」

②製鉄業立地の石炭立地から鉄鉱石立地への移行（←石炭効率の改善）

南ウェールズの鉄鉱石生産の減少

③南ウェールズでの労働運動の進展（当時鉄生産に占める労賃の割合は70～80%）

図）クロウシェイ家の証券資産の増大と工業資産の変化

クロウシェイ家：製鉄業からランティエ(rentier)化（金利・地代生活者化）

・1870年代：製鉄業経営の大幅な損失

←証券資産は100万ドルを越え、利子収入は年5～7万ポンド

ウィーナ(1981)『英国産業精神の衰退』：「産業経営者のジェントリ化」

4 イギリス製鉄業の衰退

図）粗鋼生産の国際比較

1880年代：アメリカ、1890年代：ドイツに抜かれる。

輸出先は英帝国内にシフト

「イギリス鉄鋼業の相対的衰退はなぜ起こったのか？」

バーン(Burn 1940)説：「企業者活動の衰退」「企業家責任」説

なぜ小規模生産が維持され、大規模化・技術革新が遅れたのか？

アメリカはペンシルヴァニア、ドイツはルールに立地集中

イギリスは5・6地域に分散し、企業規模も米独に比して小さい

テミン(Temin 1966)説：「環境」説

国内市場の低い成長率と米独の保護関税による英製品のしめだしが原因で企業家の責任がおよぶところではない

マクロスキー(McCloskey 1973)説：計量経済史的手法から「衰退」を否定

小括と今後のテーマ

企業者活動の衰退

産業経営者のジェントリ化

→では、イギリス製造業の衰退を招いた「事業環境」はどのような構造をゆうしていたのか？

● 次回のテーマと演習問題

6月4日：第8講 マーチャント・バンカーの台頭

堀江英一『経済史入門』7章1CD 9章4A 10章1C

大塚久雄『欧州経済史』2章4

演習問題「イギリス資本主義化におけるマーチャント・バンカーの役割を論ぜよ」

【参考文献】

ハリス『イギリスの製鉄業』早稲田大学出版部、1998

トリンダー『イギリス製鉄企業の歴史—産業革命のアルケオロジー』新評論、1986

安部悦生『大英帝国の産業覇権—イギリス鉄鋼企業興亡史』有斐閣、1993

高橋哲雄『イギリス鉄鋼独占の研究』ミネルヴァ書房、1967

大河内暁男『近代イギリス経済史研究』岩波書店、1963

クラフツ『英国産業精神の衰退』勁草書房、1984年

ハリソン『産業衰退の歴史的考察』こうち書房、1998

湯沢威『イギリス経済史—衰退のプロセス』有斐閣ブックス、1996

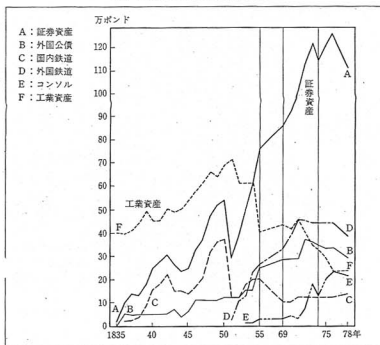
堀江英一『近代ヨーロッパ経済史』日本評論社、1960

D. Burn, *The Economic History of Steelmaking, 1867-1939* (Cambridge, 1940).

P. Temin, "The relative Decline of the British Steel Industry, 1880-1913," in H. Rosovsky (ed.), *Industrialization in Two System* (New York, 1966),

D. M. McCloskey, *Economic Maturity and Entrepreneurial Decline: British Iron and Steel, 1870-1913* (Cambridge, Mass., 1973).

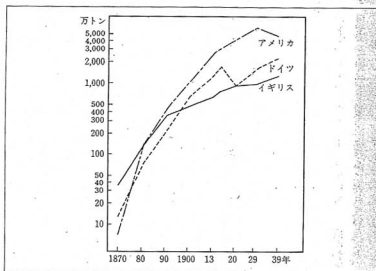
図1 証券資産の増大と工業資産の変化



出典：Cyfartha Papers, Box 14 and Ledger. 1856-68年は資料が存在しない。

白部悦生 千四頁

図1 粗鋼生産量の国際比較



出典：B. R. Mitchell, *European Historical Statistics, 1750-1975* (London, 1975); *idem, International Historical Statistics: The Americas and Australasia* (London, 1983).

安部悦生 99頁

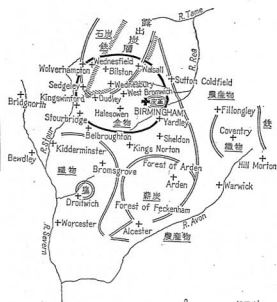


図1 バーミンガム=ブラック・カントリ地域 (黒太線にて示す)およびバーミンガムを中心とする局地的市場圏

大河内岐昂 12頁

IRONMASTERS OF THE INDUSTRIAL REVOLUTION



Taylor p.97

西洋経済史 A 文献リスト (イギリス経済史を中心に)

【1】西洋経済史全般

[1]読み物

川北稔『イギリス 繁栄のあとさき』ダイヤモンド社、1995

浜林正夫『パブと労働組合』新日本出版社、2002

浜渦哲雄『大英帝国インド総督列伝』中央公論新社、1999

岡倉登志『ボーア戦争』山川出版社、2003

[2]歴史学・経済史へのガイダンス

小田中直樹『歴史学ってなんだ?』PHP 新書、2004年。

カルロ・マリア・チポッラ『経済史への招待』国文社、2001年。

永原慶二『20世紀日本の歴史学』吉川弘文館、2003年。

住谷一彦・和田強編『歴史への視線 大塚史学とその時代』日本経済評論社、1998年

[3]教科書

角山栄編著『新版西洋経済史』(学文社、1980年)

神武庸四郎・萩原伸次郎『西洋経済史』有斐閣、1989

石坂昭雄他『新版西洋経済史』有斐閣双書、1976

荒井政治他『概説西洋経済史』有斐閣選書、1980

関口尚志他『欧米経済史』放送大学教育振興会、1994

岡田泰男編『西洋経済史』八千代出版、1995

[4]理論

山田盛太郎『日本資本主義分析』(1934年、岩波文庫、1977年)

服部之総『明治維新史』(1929年、新泉社、1979年)

中村哲『近代世界史像の再構成』青木書店、1991

中村哲『奴隸制・農奴制の理論』東京大学出版会、1977

[5]西洋経済史全般

堀江英一『経済史入門(第3版)』有斐閣双書、1979

大塚久雄『欧州経済史』岩波現代文庫、2001

堀江英一『改訂産業資本主義の構造理論』有斐閣、1960

ビオリ・セーブル『第二の産業分水嶺』筑摩書房、1993

尾崎芳治『経済学と歴史変革』青木書店、1990

渡辺尚『ラインの産業革命』東洋経済新報社、1982

渡辺尚・作道潤編『現代ヨーロッパ経営史』有斐閣、1996

クズネツ『近代経済成長の分析』東洋経済新報社、1968

ジル『経済発展論』東洋経済新報社、1965

スウィーージー『歴史としての現代』岩波書店、1954

ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、1988
ヒックス『経済史の理論』ダイヤモンド社、1970
ロストウ『経済成長の諸段階』ダイヤモンド社、1961
角山栄編『講座 西洋経済史』全5巻、同文館、1979-1980
大塚久雄・高橋幸八郎・松田智雄『西洋経済史講座』全5巻、岩波書店、1960-1962
増田四郎・小松芳喬・高村象平・矢口孝次郎編『社会経済史大系』全10巻、1959-1960
堀江保蔵・角山栄編『一般経済史』青林書院新社、1977
ポラニー『大転換』東洋経済新報社、1975
フランク『世界資本主義と低開発』拓植書房、1976
角山栄『経済史学』東洋経済新報社、1970
馬場哲・小野塚知二『西洋経済史学』東京大学出版会、2001
社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』有斐閣、2002
林達『比較経済史入門』税務経理協会、1978

[6] 著作集

『大塚久雄著作集』岩波書店

『小林昇経済学史著作集』未来社

【2】イギリス経済史

[1] 封建社会・中世

新井嘉之作『イギリス農村社会経済史』御茶の水書房、1959
バート『西ヨーロッパ農業発達史』日本評論社、1969
ビレンヌ『中世ヨーロッパ経済史』一条書店
リュトゲ『社会経済史における14・5世紀』未来社、1958
武井良朗『イギリス封建制の解体過程』未来社、1964
ブロック『領地制史論』慶応通信、1969
ガンズホーフ『封建制度』慶応通信、1968
秦玄竜『イギリス経済史研究』東洋経済新報社、1962
ヒンツェ『封建制の本質と拡大』未来社、1966
ヒルトン『封建制の危機』未来社、1956
河野健二編『資本主義への道』ミネルヴァ書房、1959
高橋幸八郎『市民革命の構造』御茶の水書房、1950
ドップ『資本主義発展の研究』岩波書店、1954
コスミンスキー『イギリス封建社会の展開』未来社、1960
ボスタン『イギリス封建社会の展開』未来社、1959
アンウィン『ギルドの解体過程』岩波書店、1980
ホブズボーム『十七世紀危機論争』創文社、1975

ヒルトン『封建制から資本主義への移行』柘植書房、1982

[2]重商主義

宇治田富造『重商主義植民地体制論Ⅰ・Ⅱ』青木書店、1964・1972

隅田哲司『イギリス財政史研究』ミネルヴァ書房、1971

デーヨン『重商主義とは何か』晃洋書房、1975

[3]農業革命

新井嘉之作『イギリス農村社会経済史』御茶の水書房、1959

楠井敏朗『イギリス農業革命史論』弘文社、1969

小松芳喬『イギリス農業革命の研究』岩波書店、1961

椎名重明『イギリス産業革命期の農業構造』御茶の水書房、1962

秦玄竜『イギリス・ヨーマンの研究』未来社、1955

[4]産業革命

ホブズボーム『市民革命と産業革命』岩波書店、1968

ホブズボーム『産業と帝国』未来社、1984

角山栄『産業革命と民衆』河出書房新社、1975

ウィルキンソン『経済発展の生態学』筑摩書房、1975

クラーク『イギリスの富、1496-1760』学文社、1970

コート『イギリス近代経済史』ミネルヴァ書房、1957

ヒル『宗教革命から産業革命へ、1530-1780』未来社、1970

フィッシャー『16・7世紀の英国経済』未来社、1971

武居良明『産業革命と小経営の終焉』未来社、1971

角山栄『資本主義の成立過程』ミネルヴァ書房、1956

林達『初期資本主義の構想』学文社、1966

山之内靖『イギリス産業革命の史的分析』青木書店、1966

シンガー『技術の歴史』6・7、筑摩書房、1978

ネフ『16・7世紀の産業と政治』未来社、1958

アシュトン『産業革命』岩波書店、1973

荒井政治『イギリス近代企業成立史』東洋経済新報社、1963

キャメロン『産業革命と銀行業』日本評論社、1973

フィリス・ディーン『イギリス産業革命分析』社会思想社、1973

クラバム『イングランド銀行 その歴史Ⅰ』ダイヤモンド社、1970

マーサイアス『最初の産業国家—イギリス経済史 1700-1914年』日本評論社、1972

マントウ『産業革命』東洋経済新報社、1964

吉岡昭彦編『イギリス資本主義の確立』御茶の水書房、1968

角山栄『産業革命の群像』清水書院、1971

小松芳喬『英国産業革命史』一条書店、1971

チェインバース『世界の工場』岩波書店、1966

山之内靖『マルクス・エンゲルスの世界史像』未来社、1968

ミンゲイ、ジョーンズ『イギリス産業革命期の農業問題』成文堂、1978

荒井政治『近代イギリス社会経済史—『世界の工場』から福祉国家へ』未来社、1968

コート『イギリス近代経済史』ミネルヴァ書房、1967

アシュレイ『英国産業組織の史的考察』大東書館、1964

ランダス『西ヨーロッパ工業史1・2』みすず書房、1980・1982

メンデルス『西欧近代と工業化』北海道大学図書刊行会、1991

ラングトン、モリス『イギリス産業革命地図』原書房、1989

[5]ジェントルマン資本主義論

ケイン、ホプキンス『ジェントルマン資本主義と大英帝国』岩波書店、1994

ケイン、ホプキンス『ジェントルマン資本主義の帝国Ⅰ・Ⅱ』名古屋大学出版会、1997

村岡健次他編『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房、1987

山本正編『ジェントルマンであること—その変容とイギリス近代—』刀水書房、2000年

[6]個別産業

①毛織物産業

パウア『イギリス中世史における羊毛貿易』未来社、1966

角山栄『イギリス毛織物工業史論』ミネルヴァ書房、1960

レイニエ編『イギリスの羊毛産業』日本羊毛産業協議会、1966

熊岡洋一『近代イギリス毛織物工業史論』ミネルヴァ書房、1993

②鉄鋼業

ハリス『イギリスの製鉄業』早稲田大学出版部、1998

トリンダー『イギリス—製鉄企業の歴史—産業革命のアルケオロジ—』新評論、1986

安部悦生『大英帝国の産業覇権—イギリス鉄鋼企業興亡史』有斐閣、1993

高橋哲雄『イギリス鉄鋼独占の研究』ミネルヴァ書房、1967

大河内曉男『近代イギリス経済史研究』岩波書店、1963

[7]労働問題

エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』岩波文庫、1990

飯田鼎『イギリス労働運動の生成』有斐閣、1958

栗田健『イギリス労働組合史論』未来社、1963

コール『イギリス労働運動史Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』岩波書店、1952

徳永重良『イギリス賃労働史の研究』法政大学出版局、1967

戸塚秀夫『イギリス工場法成立史論』未来社、1966

ホブズボーム『イギリス労働史研究』ミネルヴァ書房、1968

ウェッブ夫妻『労働組合運動の歴史（上下）』日本労働協会、1973

トムスン『イングランド労働者階級の形成』青弓社、2003